



日本気象協会に入社して最初の仕事の壁は、天気図作成だった。毎日午前9時10分からのNHKラジオ第2放送「気象通報」を聞き、天気図を作成する。それをガリ版で天気予報などと一緒に書き写したものを、謄写版で印刷し、速報天気図として市内はアルバイト学生が自転車配達、市外は郵送する。

アナウンサーが読み上げる「石垣島では、南の風、風力4、曇り、10hPa、32度。那覇では…」という各地の天気を、天気図用紙に入れ込み、等圧線・高気圧・低気圧・前線等を書き込むのが大変なのだ。およそ国内30地点、国外27地点、日本近海10地点を約10分で放送するスピードになかなかついていけず、慣れるのに半年以上かかった。40年余り前の話である。

さて、天気図にはさまざまの記号が描かれているが、一般用の日本式と専門用の国際式がある。天気の記事は日本式は15種類程度だが、国際式は100種類もある。新聞天気図は日本式だが最近絵図で表したり、気象衛星ひまわりの雲画像を重ねている紙面

# 手書きから自動化へ



【写真上】約55年前の青森地方気象台内部の写真。壁に張った多くの天気図を見ながら予報官らが検討【同下】現在のアップルウェザーの事務所。主にパソコン画面を見ながら天気予報を決める

も多くなった。

天気の区別は、雨や雪などの大気現象がない時は、全天を見回して雲の量で決めている。快晴は雲量が1割未満、晴れは2割から8割まで、曇りは9割以上である。風速は矢羽根という記号で風力階級を使っている。このうち風力

8は台風、風力12はハリケーンの基準になっている。

日本ですべて天気図が発行されたのは、1883(明治16)年3月1日のこと。昭和59年からは天気図づくりにもコンピューターが導入され、現在は気象庁の予報官が描く天気図はほとんどなくなった。

気象屋にとって天気図は、お医者さんのカルテのようなものである。カルテにも、エックス線写真やCT・MRI・採血検査などがあるように、天気図にも実況図・予想図・高層天気図・週間予報天気図のほか、各種の支援図などがあり、気象庁ではこれらを1日2回、午前9時と午後9時の観測データを基に数十種類の天気図を作成している。民間気象会社ではこれらの天気図を有料で購入している。

ただし、ほとんどの天気図は読み解く作業が必要。それをするのが気象台の予報官であり、民間会社では気象予報士である。大手の気象会社ではコスト削減のため、予報作業をコンピューターで行い、気象予報士を減らしていると聞く。コンピューターによる予報を気象庁も認めているといつから、1万人以上に達した気象予報士や、これから気象予報士を目指す方には活躍する場が少なくなりそうである。

また、天気には各地域に特有のくせがあるのだが、それでもコンピューター任せの予報でいいのだろうか。予報の自動化による誤報が増えていることも、気がかりである。

(工藤淳、気象予報士・防災士、アップルウェザー社長、青森市在住)  
※第3週に掲載します。

## 今月のお題 天気図の昔と今

日本式の 天気記号	風力階級		
	風力	風速 (m/秒)	記号
快晴 ○	0	0	なし
晴れ ⊙	1	1	↘
くもり ⊙	2	2-3	↘↘
雨 ●	3	4-5	↘↘↘
雪 ⊗	4	6-8	↘↘↘↘
みぞれ ⊖	5	9-10	↘↘↘↘↘
きり ⊙	6	11-13	↘↘↘↘↘↘
あられ ⊖	7	14-16	↘↘↘↘↘↘↘
ひょう ⊖	8	17-20	↘↘↘↘↘↘↘↘
雷 ⊖	9	21-23	↘↘↘↘↘↘↘↘↘
	10	24-27	↘↘↘↘↘↘↘↘↘↘
	11	28-31	↘↘↘↘↘↘↘↘↘↘↘
	12	32-	↘↘↘↘↘↘↘↘↘↘↘↘